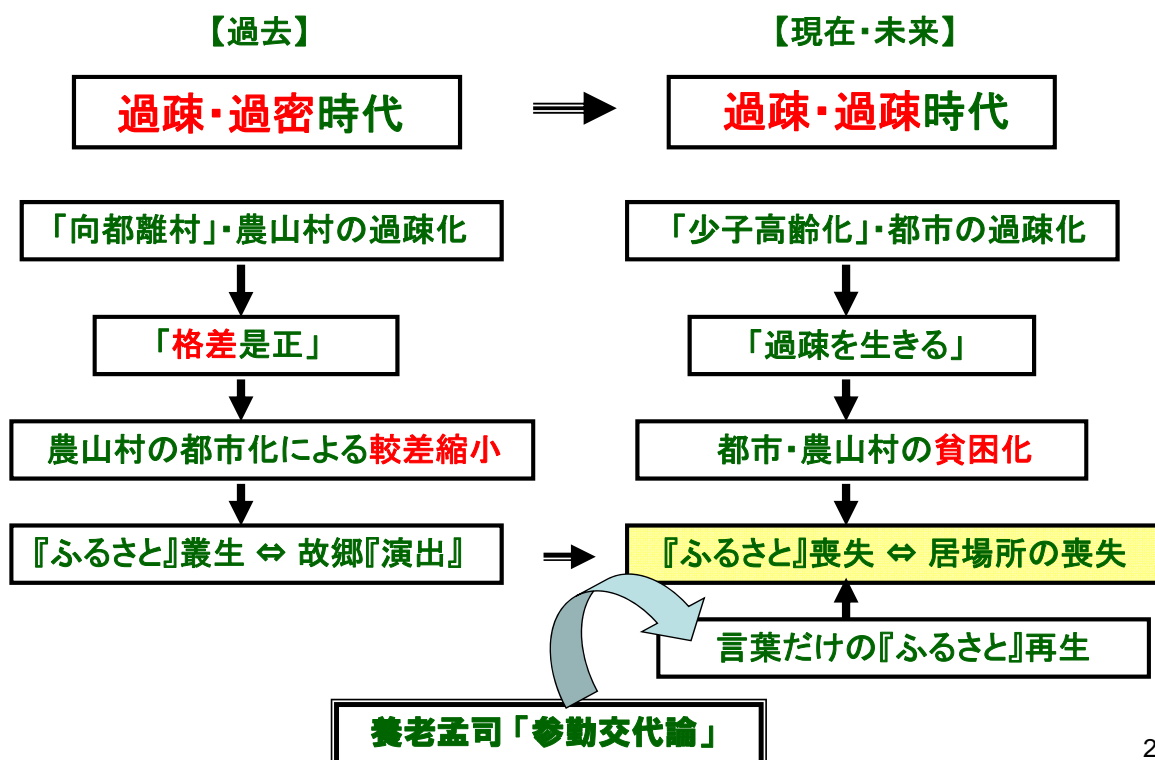


# Iターンによる居住地選択の自由拡大と住宅建築

京都大学 川村 誠



## 変貌する『国の形(かたち)』



なぜ『ふるさと』を喪失したのか (1) 「非移動」社会へ

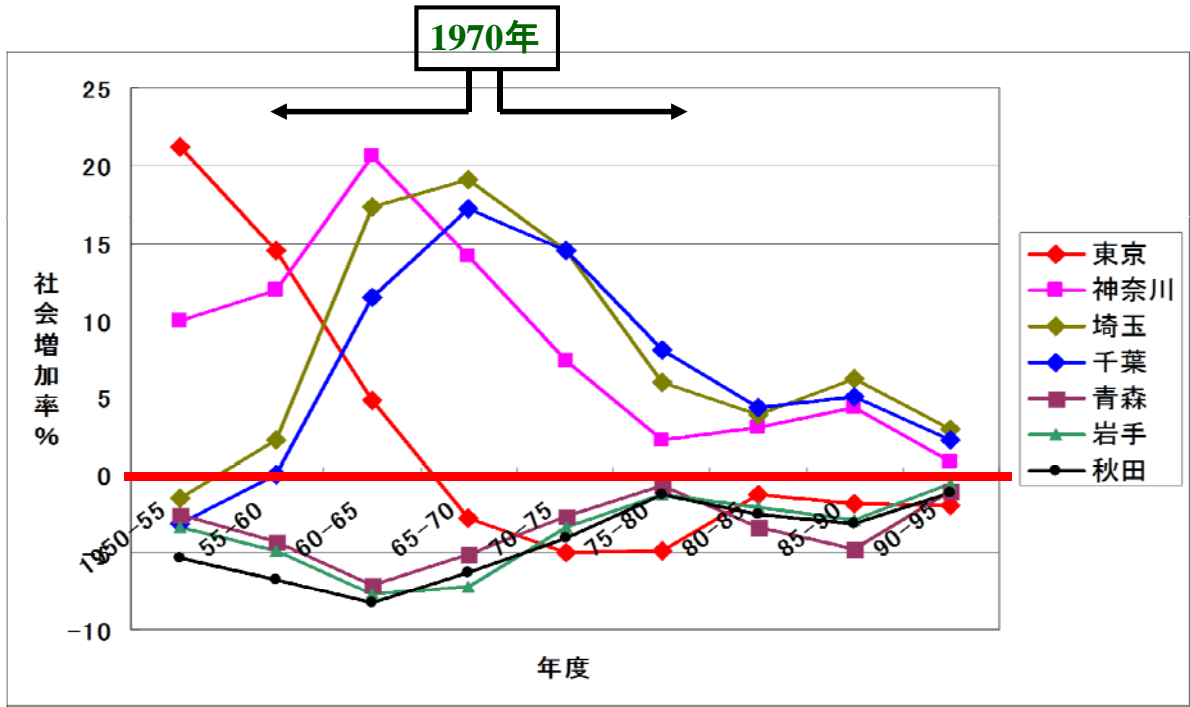


図 府県別人口の社会増加率 (国勢調査)

なぜ『ふるさと』を喪失したのか (2) 「農家」解体

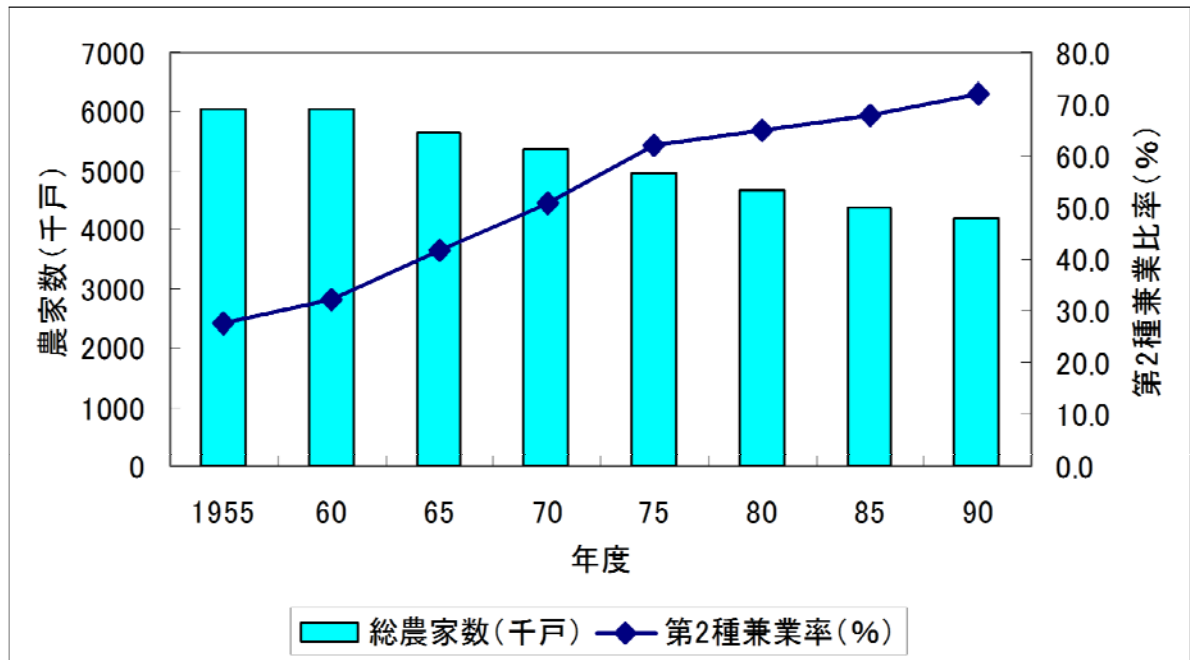


図 「第2種兼業農家」の推移 (世界農林業センサス、その他)

## 再生すべき『ふるさと』の姿を求めて(1)

養老孟司「参勤交代論」

新たな**移動社会**の実現

都市・農村の**双方向性**はどのようなプロセス(道筋)を経て高まるのか

- (1)EU諸国のように、都市と農村が城壁にて判然と区別されていた社会では、双方の魅力を再確認することによって、新たな交流が可能 → 『**グリーンツーリズム**』創出
- (2)日本の場合、都市文化による意識的な区別を除いて、実態として都市・農村の仕切りは無く、人的交流も活発。農村生活は簡単に都市化。双方にとって、魅力の確認は困難。  
→ 『**日常的な住まいとしての農山村**』再発見

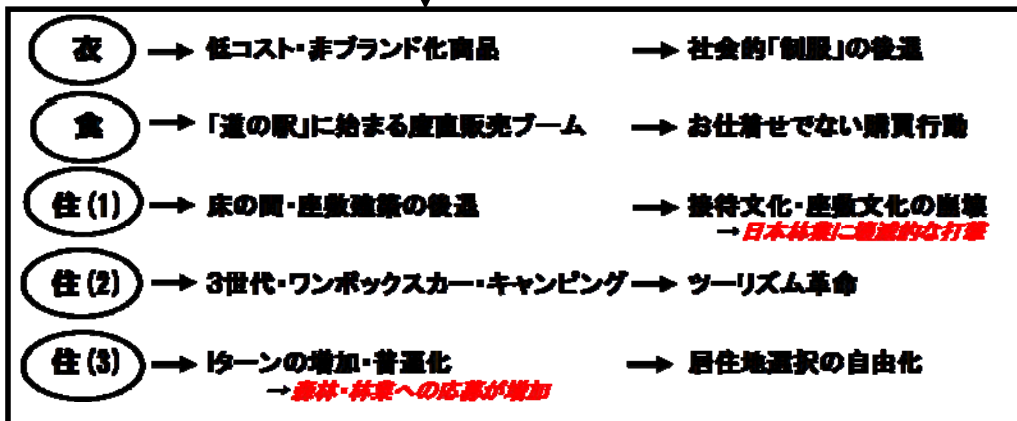
5

## 再生すべき『ふるさと』の姿を求めて(2)

『**日常的な住まいとしての農山村**』

都市・農山村を問わず、**自由な居住地選択**が可能な時代は来るのだろうか

1990年代に起こったこと



6

## 再生すべき『ふるさと』の姿を求めて(3)

1990年代に起こったこと

- (1) 全て、その道の専門化が予想しなかった“サプライズ”
- (2) 個人や家族の選択が優先
- (3) 「**かくあらねばならい**」文化からの脱却

衣食住・全ての生活文化の変容の兆し

- 【文化変容の第一波・第二波】
- I 明治以後の「西洋化」  
⇒ **接待文化・座敷文化**の残存と継承
  - II 1990年代以後のグローバルゼーション  
⇒ **接待文化・座敷文化**の崩壊

7

## 再生すべき『ふるさと』の大工・工務店は何をしてきたのか (1)地産地消の行方

- I 高度経済成長期・前半の地元大工  
“農家住宅のリフォーム時代” ⇒ 「地産地消」
- II 高度経済成長期から低経済成長期への転換  
“本格的な農家住宅の建替え時代” ⇒ 「他産地消」
- III バブル経済期を挟んで  
“都市周辺への拡大” ⇒ 「他産外商」
- IV 90年代以後  
“市場崩壊と撤退” ⇒ 地域需要の掘り起こし

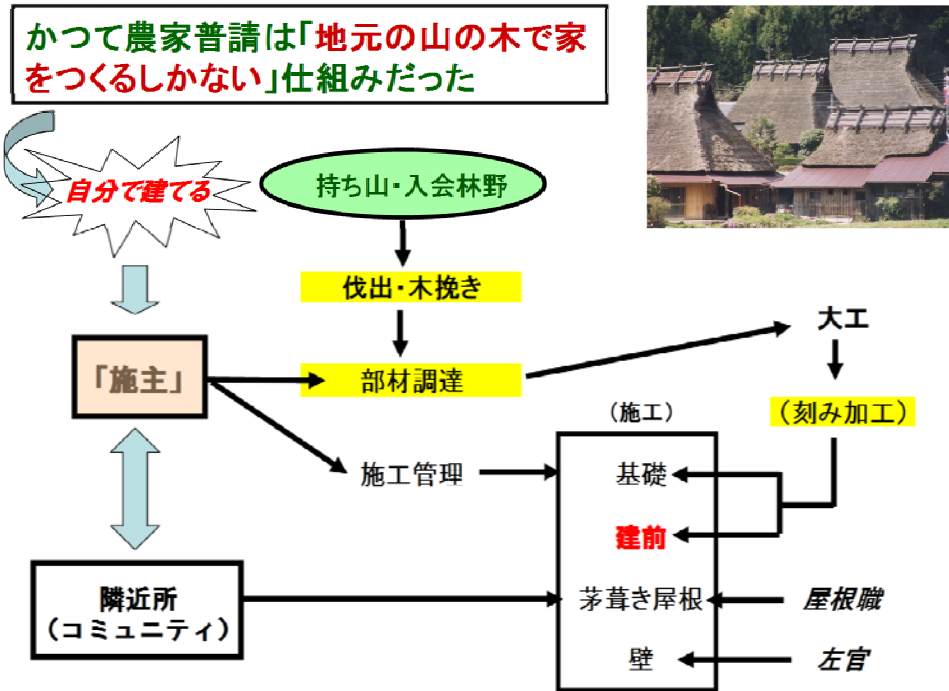
Iターンは地産地消へ向かうか

村(ムラ)の大工・工務店の後継者像

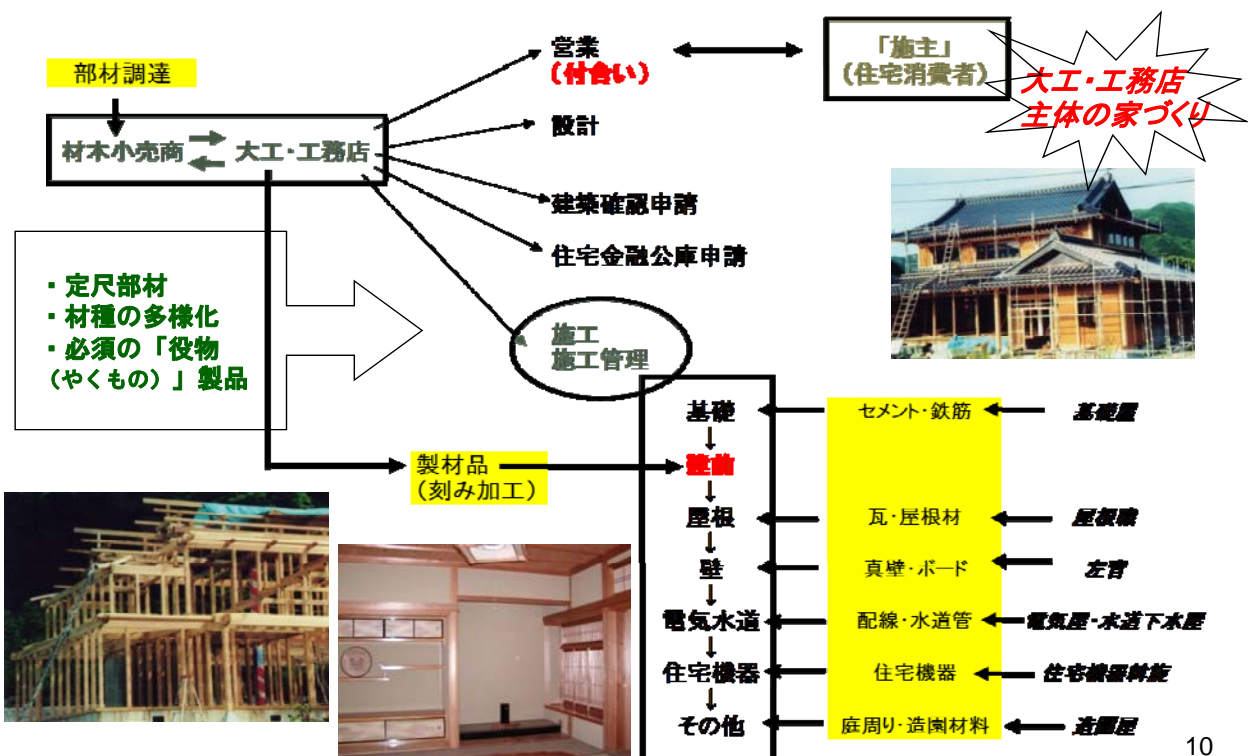
8



再生すべき『ふるさと』の大工・工務店は何をしてきたのか  
 (2)「在来工法」住宅のシステム転換 「地産地消」時代



再生すべき『ふるさと』の大工・工務店は何をしてきたのか  
 (3)「在来工法」住宅のシステム転換 「大工一式請負」へ



再生すべき『ふるさと』の大工・工務店は何をしてきたのか  
(4)「在来工法」住宅のシステム転換 「在来工法」の特徴

- 1 柱角を多用する二階家住宅(⇒子供部屋)
- 2 住宅の「製品差別化」以上に、住宅内の部屋別の「差別化」  
⇒座敷(床の間)の導入  
⇒座敷と家族部屋とで使用部材に「差別化」  
⇒大壁工法であっても柱角・造作材の“無節・色・目合い志向”
- 3 材木小売商(地方市場では製材工場)と大工・工務店の長期継続取引による「部材選択」(事実上の最終消費段階)  
⇒小規模分散的な大工・工務店に多種目多量の部材を随時に供給するシステム
- 4 高価格部材の選択によるマージン取得
- 5 大工・工務店による住宅建築の生産性向上、その困難性  
⇒増産は、「一式請負」単位を横並びに増やすことによるしかない
- 6 輸入丸太から製材された製品は、この「在来工法」システムへ流れ込んだのであり、輸入材(「外材」)で外国の住宅が建てられたわけではない

11

再生すべき『ふるさと』の担い手

Iターンによる“入れ替わりモデル”

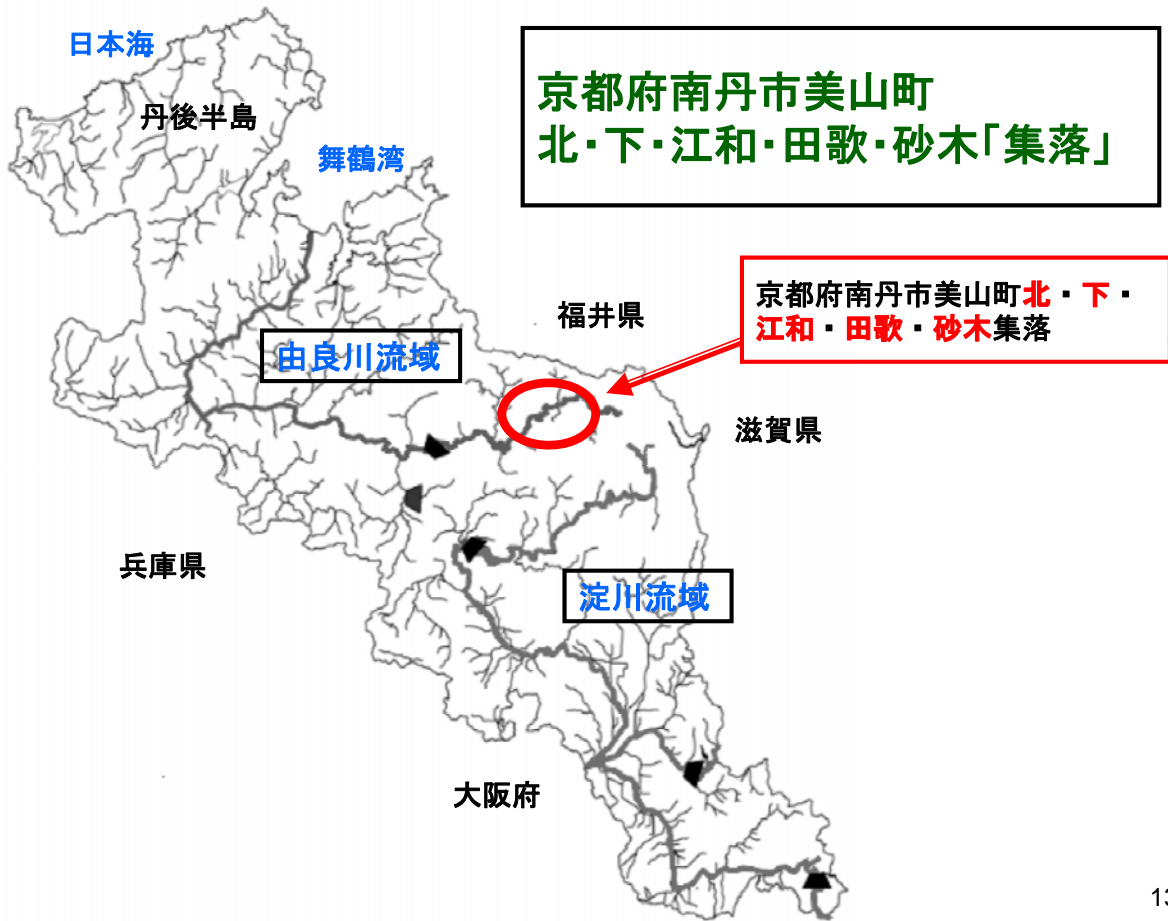
【集落の現状】

集落単位で見ると、過疎化の進行が止まらない集落もあるが、一方で、人口や世帯数の落ち込みが小さい、あるいはむしろ増えている集落が目立ってきた。Iターンの増加である。それも、よく言われる「交流」ではなく、元の農家と入れ替わるように住む人が増えている。

【住宅の変遷に現れた入れ替わりモデル】

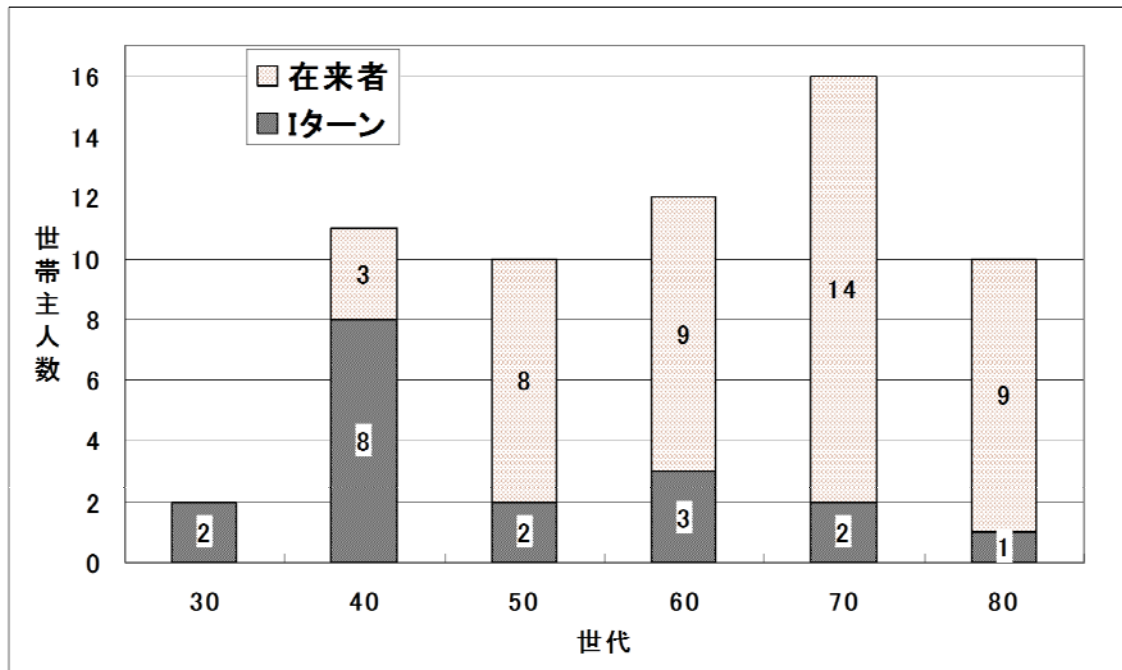
家作りの面からみると、第1に、Iターン者が茅葺の農家住宅に手を入れて住む形態、第2に、古い農家住宅を解体して移築、フルモデルチェンジして新しく住む形態。第3に、Iターン者によって、茅葺など伝統的なデザインを生かした新築が行なわれる形態である。第2の形態には、在来の居住者が新築・改築にあたって、第3の形態と同じく、あえて伝統的な家屋にこだわる場合も含まれる。つまり、Iターン・Uターン、在来の住民を含めた“入れ替わりモデル”と呼ぶべき行動が始まっている。

12



13

## 田歌・江和の2集落における世帯主・年齢構成



注1 調査可能な61世帯の集計値

2 嘉門洋介「山村における生活エネルギー転換と薪材利用」(2009年京都大学農学研究科修士論文研究)による

14

## Iターンの生活文化は集落を変えるのだろうか

表 田歌・江和の2集落における薪材利用の現状

薪材利用形態	世帯数			構成比(%)		
	在来世帯	Iターン世帯	合計	在来世帯	Iターン世帯	合計
薪ストーブ	2	11	13	4.5	61.1	21.0
五右衛門風呂	2	1	3	4.5	5.6	4.8
薪兼用風呂釜	3		3	6.8		4.8
小計	7	12	19	15.9	66.7	30.6
世帯総数	44	18	62	100.0	100.0	100.0

注1 調査可能な62世帯の集計値(前掲図とは総数が異なる)

2 「薪材利用形態」の回答は延べ数

3 Iターン者では、他に薪ストーブ希望者が5世帯主ある

4 嘉門洋介「山村における生活エネルギー転換と薪材利用」(2009年京都大学農学研究科修士論文研究)による

15

## Iターン住宅 「他産地消」タイプ

「施主」: Iターン茅葺職人



美山町砂木集落

16



## 北集落・伝統的建造物群保存地区の場合

復元・修復⇒元々、これらの家を建てた地元の大工さんの手の届かない所へ行ってしまった！！



新築の資料館のみ地元工務店の建築



17

## 究極の「地産地消」建築(地元の身近な山の木で)

京都府南丹市美山町「下」(しも)集落

**“自分の手で植えた木で…自分の家を建てた人”**



典型的な中二階の農家住宅として新築された。施主・大工・製材工場、それぞれの地域へのこだわりが伝統建築をよみがえらせた(撮影:2008年9月17日、嘉門洋介)

美山町下(しも)には、自分が育てた山の木で家を作った人がいる。文字通りの地産地消である。西山成一郎氏(82歳)は、自家を建て直すとき、自分がおじいさんと一緒に植えたスギ・ヒノキ山から、必要な材を調達した。大工の棟梁が指示する部材に見合う立木を選んで、息子さんと二人で伐採し、森林組合から借りたチルホールを使って林道まで運び出した。製材工場のトラックで工場へ運ばれた丸太は、大工の「木拾い」に合わせて製材された。家屋は、伝統的な中二階の瓦屋根で、梁桁や棟木には自分の山のアカマツを使っている。大工の棟梁は、隣の集落在住の「オオウエ工務店」である。

**大工さんも地元です!**

18

## まとめ

### 移動社会の復権 —ふるさととは誰のもの—

都市・農山村の双方向性の復権

90年代以後の日本の社会変化“文化変容”

住宅革命に学ぶ⇒住宅とは、よりフラットな関係の空間的表現

住まいの選択(居住地選択)の自由化 ⇒ **1ターンによる入れ替わり**

「過疎・過疎」時代に向けた地域変容

19

## 引用・参考文献

川村 誠(2006):「北山杉—伝統の技が生む文化的景観」農業と経済、Vol.72(5)、p43-48

川村 誠(2008a):「グローバル化する森林・林業問題と政策課題」林業経済研究、Vol.54(1)、p3-13

川村 誠(2008b):「地域に根ざした家づくり」農業と経済、Vol.74(13)、p77-83

川村 誠・坂野上なお・長谷川 正(2010a):「日本林業の再生」(井口 隆史編著:『国際化時代と国際化時代と「地域農・林業」の再構築』、日本林業調査会、2010 所収)

川村 誠(2010b):「日本の林政と課題」(中国経済産業局(2010)「バイオマス産業の担い手人材育成研修 in 真庭」研修資料)

川村 誠(2010c):「なぜ地元の木が使えないのか?」(あいちの木需要拡大協議会シンポジウム 2010.2.5 資料)

20